

---

# 魔法先生ネギま！～人形転生記～

イザナミ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法先生ネギま！〜人形転生記〜

### 【Nコード】

N7252Z

### 【作者名】

イザナミ

### 【あらすじ】

普通の高校生だった少年は何の因果か1番目として転生してしまう。彼は死亡フラグを回避しつつハーレムフラグを立てるため奮闘するのだった

本作は、原作準拠、駄文、ご都合主義、チートが含まれます

## プロローグ

諸君はこんな経験はあるだろうか？

目が覚めたら狭い空間に閉じ込められていた

うん、我ながら何を言ってるんだと正気を疑うレベルだ  
あれか、誘拐か

何の変哲もない一介の学生を攫って何の利益があるんだか……

まあ、それはさておき狭い空間に閉じ込められているというのは事  
実なので俺は大人しくする道理もなく  
めたくそに暴れる

元々、空間がもろかったのか大して時間もかからず壊れ光が見える  
俺は急いで破片を取っ払い、周りを確認するとそこは、まるで地下  
室のような薄暗い空間が広がっていた

先ほどの壊れたものを見るとどうやら棺桶だったらしい  
誘拐した人物を棺桶に入れるとは大変すばらしい趣味（嫌味）をお  
持ちで

と、俺はそこでふと、覚えのない記憶が頭にあるのに気付く  
不思議に思い探ってみると魔法やらなにやらファンタジーな単語が  
次々出てくる

そして、いくつも見覚えのある単語もあった

完全なる世界 造物主 ナギ・スプリングフィールド

どう考えてもネギまでです。本当にありがとうございました  
なんで!?

俺、昨日 寝るまでは確かに自分の部屋だったよな!?

それがなんでいきなりネギまの世界にきとん!?

あれか、二次創作でよくある転生ものか

納得できるかばかもん！ 責任者をだせ！

そんな心の葛藤を続けていると後ろから声がかかる

「驚いたな、確かに機能は停止していたと思ったのだが」

振り向いてみるとそこにはどこかで見たとある仮面ローブ男が  
立っていた

確か……デュナミスだったか？

「それにしても2年ぶりくらいか？1番目」

1番目？誰が？

俺しか居ませんね

そう、大変信じがたいことではあるが俺は……

只の高校生だった俺はネギまの世界の

1番目になっていた

## プロローグ（後書き）

感想お待ちしています

## テラ・アーウェルンクス

「なるほど、再起動したことで別人格が宿ったというわけか」

デynaミスがなるほどと言った感じでうなずく

俺は今、デynaミスの部屋で事の次第を話していた

まあ、馬鹿正直に転生しました（・>）

とか言っても、いくら何でもありの魔法世界といえど、いきなり転生とかぬかしたら痛い目で見られること必至なので

あえて、それっぽい嘘をつくことにした

「そういうことですね。ただ、以前の記憶もありますから貴方の事も覚えてますよ」

そう、この体は元1番目ということもあり壊れるまでの記憶を保持していたのだ

その記憶によるとどうやら過去編は決着がついてるらしい

デynaミスの話からすると2番目はもう起動しているとのこと

ちなみにフェイトは1番目を基本に作る予定だったのが俺（1番目）が復活したため先送りになったらしい  
まじさーせん

あ、ちなみに敬語なのはこの外見に合わせてだ

キャラ作りって大切だと思わんかね？

「なるほどな。……それで、これからどうするのだ？」

そうだな

俺としては、フェイトの代わりにネギの敵として立ちほだかるとい  
うのも面白そうだ

だが、やはりやるならメイン側をやりたい

というか、ネギ・パーティならぬ3Aの俺・パーティを結成したい  
まあ、それに至るまでにいろいろ準備は必要だが、幸い原作開始ま  
で時間もあるし最初はここで修行も悪くない

修行が必要ないチートボデイでも戦闘経験が無いと宝の持ち腐れだ  
しな

え？随分順応が早いって？

どうせ、転生したんだったら楽しみたいだろうが

「そうですね、最初はここでいろいろ教わりたいですね。いずれは  
世界を周りたいたいです」

「そうか……それもよからう。まず何を知りたい？」

それから俺はデュナミスにこの世界の事や戦闘技術を教わった

チートボデイだけあって、この体は本当に強かった

元々戦闘経験の無い俺でも普通にデュナミスと渡り合ってしまうのだ  
これに勝つナギってホントにバグだったんだな

とりあえず、原作で1番目やフェイトが使ってた魔法は一通り使え  
るようになった

途中、2番目が俺の方が強いとかぬかして俺に喧嘩を吹っかけて来  
たのでネタ技でフルボッコにしてやったw



ちなみに砂縛すなばく枢しゅうというNARUT の我 羅の技で大量の砂で敵を押しつぶす技だ

我 羅の技は基本、どれも強力なのだが大量の砂が必要なため使いどころが難しい 今後の課題だな

まあ、それからは2番目はすっかりびびって俺の事を兄さんと呼ぶようになったw

あ、そうそうそれからフェイトも起動した

基本のデータはできてたそれで属性は俺と同じ地だそうだ

まあ、原作通りのフェイトと思っていた方がいい

原作通り最初は感情が乏しい

まあ、これからあの子に会ったりして変わっていくのだろう

ちなみに俺は完全なる世界側は特に干渉するつもりは無い  
下手に関わってフェイト側が勝つことになったらやだもん

え？2番目をフルボッコにしたのはいいのかって？

かませだからいいんだよ

そして、原作開始から15年前ほどになったとき、俺は世界を周ることにした

「行くのか」

デユナミスが話しかけてくる

「ああ、僕は僕なりに世界を救う方法を探したいしね」

まあ、そんなの思いつかないのですべてネギ任せだがな！

「そうか、まあ、お前がそう思うんならいいだろう。縁が会ったらまた会おう1番目」

「それなんだけどさ。今度から僕のはテラ・アーウェルンクスと名乗ろうと思うんだ」

これは前から考えてたことだ

転生前の名前は日本名なのでこの外見にはまず似合わない  
なら何がいかと考えたらラテン語の地<sup>テラ</sup>というわけだ

「なるほど。地<sup>テラ</sup>のアーウェルンクスだからか。了解だ、ではまたな  
テラ」

そうして俺はデュナミスと別れを告げ墓守の宮殿を後にした

## 少女との出会い

墓守の迷宮を出て2年ほど経過した

途中、フェイトが2番目を倒したというのは話を聞いたが正直どうでもいいのでスルーした

現在、俺はとある家にお世話になっている

「テラさん？夕食の用意が出来ましたよ」

「あ、わかりました。今いきます。リナさん」

肌が浅黒く美しい黒髪の女性 リナ・アルカナが俺を呼びに来る

「マナは……寝ちゃったのね。いつもごめんなさいね？娘の相手をしてもらっちゃって」

「いえ、構いませんよ」

リナさんが俺の膝の上で眠っている娘を見て微笑む  
娘の名はマナ・アルカナ

まあ、察しのいい読者様はお気づきだろうが彼女は竜宮真名だ

とある事件で彼女が誘拐されかかってたのを助けたことが縁で彼女に懐かれ

母子家庭と言う事もあり用心棒代わりにここで世話になっているのだ

原作でもハーフと言っていたこともあり父親は魔族だが現在は行方

不明

小さい村で母と娘の二人暮らしだったそうだ

真名が幼少のころから孤児だったことを考えるとおそらく近いうち  
にリナさんが何らかの理由で亡くなってしまふのだろう

できることなら真名には幸せになってもらいたい

原作の流れを変えてしまふかもしれないが極力、二人仲良く暮らし  
てもらおうと思っっている

まあ、それもあり俺はここで用心棒をしてるのだ

しかし、俺は麻帆良に行くためにもこなさなければいけない難問が  
あるので長くてもあと1年が限界だろう

最悪の場合、二人を連れて旅に出ると言うのもある

ぶっちゃけた話、親子丼というのも悪くは（ここから先は検閲に引  
つかるため規制中）というわけだ

だが、そんな暮らしもある日あっさりと終わってしまった

俺とマナがりナさんにおつかいを頼まれ隣の町まで買い物に行き帰  
ってきたときだった

村の方角から煙が見えたのだ

何か嫌な予感がした俺はマナを抱えて急いで村へと向かった

村に着くとそこには盗賊たちが周りに火を放ちながら村の人たちを  
手にかけていた

「ひゃーっはっはっは！村人は残らず殺せ！金目のものは全て奪い  
取れ！」

「ヴィシュ・タル リ・シュタル ヴァンゲイト

ミッレ・グロディイ・オブシディアリー  
千刃黒耀剣！！」

瞬間、俺は理性が吹き飛び近くに居た盗賊達を無数の石の剣で串刺しにする

「な、誰だ!!」

運よく離れた場所に居て攻撃を免れた他の盗賊が異変に気付き俺に向かって叫ぶ

「僕か……？僕はこの村の住人だ！ヴィシユ・タル リ・シユタル  
ヴァンゲイト……」

俺は、周りの気配から住人は全て殺されてしまったと実感し、悲しみと同時に怒りがこみ上げ  
死すらも生ぬるいと感じこの辺りすべてをカバーする強力な永久石化の魔法を唱える

盗賊たちは逃げる間もなく一瞬で石化する

この魔法はアレンジを加え、石化してる間の意識をはっきりさせるようにしてある

つまり、盗賊たちは永遠の生の苦痛を味わわなければならないのだ

その後、呆然とするマナを連れ自宅があった場所に戻るとそこには焼けた家と血まみれで倒れているリナさんが居た

心音がすでに止まっていることからもう手遅れだというのが感じ取れた

「お母さん……？ねえ、起きてよ、お母さん！」

マナはこの状況を受け入れたくないのか、目に涙を浮かべながら必死にリナさんの体をゆする

「マナ……リナさんはもう」聞きたくない!!」「マナ……」

そりゃそうだ

ただだか、2・3歳の女の子がいきなり母親が死んだと言っても受け入れられるはずがない

「お母さんは寝てるだけだもん!お母さんは「マナ!」「!?!?」

「君のお母さんは此処には居ない……遠いお星さまになったんだ……そして君を見守っている」

「だから、君が泣いていると見守っているお母さんが心配してしまう。ね?」

俺の言葉にマナは大声で泣き出してしまう

俺は何も言わずマナを抱きしめ頭をなでてやる

それから10分ほど経ち泣きつかれたのか寝てしまったマナを近くの木の下に寝かせ俺は村人達の墓を作ってやった

「もう、リナさんの手料理は食えないのか」

全員の墓を作り終わると俺は、ふとそんなことを思う  
原作のフェイトもこんな感じだったのだろうか

「お兄ちゃん……」

声のした方を見ると目を真っ赤にさせたマナが立っていた

「これからどうするの?」

「そうだな、皆のお墓も作ったし僕は旅に出ようと思う」

このままこの村に居てマナと一緒に墓を守るという手もある  
だが、俺が1番目に転生したのは多分ストーリーに関わるべきなん  
だと思う

だから、あえて俺は旅に出ることにした

「私も行く!」

「大変だよ?マナは近くの街の孤児院で……」

「行ってくたら行くの!一人はやなの……」

マナが再び泣きそうな顔をしてこちらを見てくる

「……わかった。一緒に行こう」

本当なら彼女を連れて行くのには抵抗がある  
最初はハーレムフラグとか考えていたが今、一緒に暮らして俺は  
彼女が幸せなら何でもいいと思っていた  
だが、こうして俺を慕ってくれているならそれにこたえるのが男と  
言うものだ

そして、俺はマナと共に旅に出たのだった

いざ、旧世界へ(前書き)

年始年末は多忙だったため、更新遅れました



## いざ、旧世界へ

マナと旅して1年ほど経った

旅の道中、マナに強くなりたいたいから修行してくれと頼まれたので、とりあえず原作通りにするため、銃を教えることにした

原作の影響力が働いてるのか、マナはめきめきと腕を上げそこからへの大人に負けないくらいに強くなっていた  
銃に関してならおそらく俺と同等程度だろう

まあ、それはさておいてだ

俺たちは今、旧世界の京都に向かっていた

理由は簡単、原作開始の約10年後に麻帆良に入るための伏線張りのためだ

中身が違つとはいえ、見た目は元巨悪組織の幹部

さすがのお気楽ジジイもおいそれと俺を雇いはしないだろう  
ならばどうするか

答えは簡単、学園長の孫娘 木乃香と仲良くなることだ

その為には彼女が小さい内に会っておく必要がある

まあ、そのためには詠春を攻略しなければならぬのだが何とかなるだろう

こんな打算的な事を考えるなんてことは前の俺からは想像つかないが、魂は肉体に引つ張られると言っし  
これも、1番目に憑依した影響なのだろう

「ねえ、これからどこに行くの？」

マナが俺の方を見ながら尋ねる

「昔、僕の敵だった人の所さ」

そうそう、喋り方なんだけど フェイトの話し方を意識してたらもう無意識でこれになったw

「なんで、そんな人の所に？」

「まあ、色々とね……っと、あれは……」

質問をはぐらかしながら俺はふと、目の前の方で誰かが騒いでいるのが見えた

「……ちゃん！……かりせえ！」

よく聞こえないが女の子の声だ  
どうやらせっぱつまっているようだ

ここで、俺は思い出す

原作で、刹那が木乃香と距離を置くようになったあの事件  
木乃香が川におぼれたアレだ

どうやらそれが今らしい

俺は、急いで川に向かって走り出す

「どうしたの、兄さん！」

急に走り出す俺を見てマナもつられて走り出す

「女の子が溺れている！マナはあそこの女の子と一緒に助けを呼びに！」

「わかった！」

俺はマナに指示をした後、川に着くとためらわず川に飛び込み木乃香らしき女の子を抱えあげる

どうやら気を失っているようだが命に別状はないようだ

原作でも生きていたから大丈夫だと思うがやはり、目の前で体験すると気が気じゃない

俺は木乃香を抱えたまま岸にあがると風邪を引かないよう、火系の魔法を唱える

本来の属性は地なので大した魔法は使えないが温めてやることくらいはできる

多少、服が乾いてきたところに大人たちを連れたマナが走ってくる

「木乃香！」

そこへ、不健康そうな中年の男が前に出てきて木乃香を抱え上げるとおそらくこれが詠春だろう

俺の一番目としての記憶でもほぼ合致する

「命に別状はないよ。ただ、水を結構飲んだみたいだから安静にする必要があるけど」

俺の言葉にホツとするが、すぐに険しい顔になる

「お前は……！」

「安心してよ。僕は今は敵じゃない。それよりもその子を」

「そうだな……詳しいことは後程聞こう」

・  
・  
・

その後、とある客間に通された俺とマナは詠春と対談をしていた

「つまり、お前はあの時とは別人格と言うわけか？」

「まあね、君たちと戦った記憶はあるけど、あくまでその程度。思想も考え方もあの時とは違うよ」

「その見た目は人格と関係があるのか？」

言い忘れていたが、今の俺は年齢詐称薬により8歳程度の見た目だ  
なぜ、こんなことをしているかという木乃香達と再会したときに  
不審に思われないためだ

現時点では詠春は木乃香に魔法を知られることを嫌がっている  
結局ばれるので協力する必要はないのだが、まあ一応だ  
それに木乃香達と見た目が近い方が仲良くもなれるしな

「いや、これは便宜上この姿だけで本来は君たちと戦ったときの  
ままだよ」

「そうか……、で、ここには何しにきたんだ？」

やはり、すべてを信じるわけにはいかないのか疑いのまなざしを向  
けてくる

「うん、この子を預かってほしいんだ」

「「え？」」

俺の言葉に詠春はもちろん、マナまでも驚く

「兄さん、今なんて？」

「ん？マナを預かってほしいと言っただ」

「なんで！？兄さんは私が嫌いになったの！？」

「そうじゃない、いいかいマナ。君は普通の女の子と同じ幸福を知るべきなんだ」

普通に勉強し、普通の友達を作りそんな生活を送ってほしい  
ただ、学校に行かせるには俺のような住所不定男が保護者では無理  
なので一番手近な詠春に任せようと思ったのだ

「嫌だ！私はそんなのいらない！兄さんと一緒にいい！」

こんな俺Loveな女の子が将来俺のハーレムに入るのだと思えば  
胸熱なのだがここはぐっとこらえる

彼女には、もう一つの役目として刹那と仲良くなってもらって彼女の  
苦しみを和らげてもらわなければならないのだ

刹那も俺のハーレム候補 そんな彼女が原作開始後の修学旅行時  
まで苦しむなんてのは言語道断

故に、マナにはここに残ってもらうのだ

「マナ、君は学ばなければいけないことがたくさんあるんだ。一生会えないわけじゃない。僕の言う事を聞いてくれ」

「……兄さんの馬鹿！」

そう言い放つとマナは外に出て行ってしまっ

「いいのか？」

「マナならわかってくれるさ。それでどうなんだい？」

「正直、お前の事は信用できない。だが、彼女に対するお前の態度を見れば親としては共感できる」

「それじゃあ、頼めるかい？教育費はもちろん払う」

「了解した」

「まあ、彼女たちが小学校に上がるまでは僕もいるけどさ」

「なんだったら、ずっと居ればどうだ？俺も監視できるしな」

「いや、僕にもやることがあるんでね」

もう一つの人脈づくりをな

「そうか」

こうして、やや強引ながらも俺は詠春という人脈を手に入れた俺は、なんとかあったことに安堵しつつマナの機嫌を直す方法を探

す  
の  
だ  
っ  
た

いざ、旧世界へ(後書き)

感想お待ちしています



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7252z/>

---

魔法先生ネギま！～人形転生記～

2012年1月9日05時45分発行